

性格と公共性

- C.W.ミルズの「性格」の概念をめぐって -

東京大学 高田正哉

①報告の概要および背景

本報告は、Charles Wright Mills (1916~1962) の「性格 (character)」の概念を考察することを目的としている。戦後のアメリカ社会学では、性格についての著作や論文が多く見られる。中でもミルズの性格の概念は、次のような点で独創的なものである。それは、アメリカ社会の公共社会の後退と社会工学的発想の台頭に対する批判である。ミルズは性格の概念が、公共性を失い陳腐なステレオタイプとなることに危惧を抱いていた。そしてそのような危機感をもって性格を社会的に分析したのが『性格と社会構造』(*Character and Social Structure*, 1953) である。該当書では、性格はステレオタイプ化した人間のイメージと捉えられている。しかし、ミルズの議論はそれだけにとどまらない。ミルズの目的とは、公共性を失い、ステレオタイプに基づいた政治を行う大衆を批判し、「第一次的公衆 (primary public)」の復活を探るためのものであったのだ。以下、報告者はこの前提を踏まえた上で、次のような検討を試みたい。

②方法

本報告は、社会学史について検討を行うものである。よって、本報告はミルズの文献を、テキスト面とコンテキスト面で検討することを目的としている。テキスト面では、ミルズの一次文献の検討を行う。具体的には、ミルズの性格論の中心となっている『性格と役割構造』を検討する。また、ミルズの全体像を捉えるために、著作として『社会学的想像力』(*Sociological Imagination*, 1959) を、そして論文集として『権力・政治・民衆』(*Power, Politics, People*, 1963) の検討を行う。コンテキスト面としては、戦後アメリカ社会学史、ミルズについての先行研究について検討を加える。また、戦後アメリカ社会の全体像をとらえるために、アメリカ社会論などの検討を行う。

③考察

検討の結果、ミルズの性格の概念は、次のような意味を持つと考えられる。それは、性格とは人びとが公共性を実現するために参考すべきものであったということである。それには二つの意味があり、第一に、性格は人びとに示されている点である。人びとは、社会に示された性格に基づいて、自己に適合する社会的振る舞いを行おうとする。つまり、性格は人びとに開かれ、共有されている点で公共的なものである。第二に、「公衆 (the public)」の概念が中心となっている点である。公衆は公共的な問題について他者と対話を通して解決していこうとする存在である。この論点は、デューイなどの討議にもとづく公衆というヴィジョンにも共通している点である。その文脈を引き継いで、ミルズは性格の類型として「公衆」を示した。つまり、性格に公共的な意味を持たせようとしたのである。性格とは、それ自体が公共的な意味を持つべきものなのである。

④結論および今後の展望

先行研究を調べた限り、ミルズの大衆論において公衆および公共性についての議論は確かに行われていた。しかし、ミルズの公共性についての議論を中心とした研究は非常に限定されたものであった。そのような先行研究を踏まえて、報告者はミルズの性格論が、多くの人びとに共有される点で、公共的であり、公共性を実現するためのものであったと結論づける。よって本報告は、ミルズの公共性についての見解が、他の理論にも通底していることを示す点で、新規性があると言えるだろう。

[文献] Hans H Gerth, C Wright Mills. *Character and Social Structure; the psychology of social institution*, 1953. Harcourt, Brace and World, Inc. (= 古城利明、杉森創吉訳『性格と社会構造 ; 社会制度の心理学』青木書店、1970年) 他